

## 第2回 球磨川下流域環境デザイン検討委員会 議事概要（案）

日時：平成25年2月18日（月）9:00～12:00

場所：やつしろハーモニーホール 3階 大会議室B

### ■議事要旨

#### 1. 開会挨拶

- ・八代河川国道事務所長より招聘者紹介を交えた挨拶がなされた。

#### 2. 事務局からの説明

- ・第1回委員会の議事要旨について説明がなされた。

#### 3. 議事

##### ① 球磨川下流域の土木治水史について

委) 萩原堤防を望む昔の写真があるが（資料①P9）、現在も公園として整備されているのか。

事) 稲荷神社になっているが、現在は樹木が生い茂っていて、萩原堤防を望むことができない。

委) 昔の萩原堤防は、松の木を植えていたので、八代八景では「松塘（まつども）」と言われていた。

委) 「塘」と「堤」の使い分けはあるのか。

委) 特別にはない。地元ではどちらでも使う。現在は「堤」を使う。

委) 熊本では、堤防のことを「とも（塘）」または「つつみ（堤）」というようだ。北部九州では、「土居（どい）」と言っている。

委) 遙拝堰を八の字に作った理由はあるのか。また、いつごろできたのか。

事) 八の字に造った理由は不明である。

委) 奈良時代には杭瀬があったと言われている。洪水によって人吉からご神体が流されてきて、杭瀬に引っかかったご神体を祀ったのが遙拝神社の始まりである。杭瀬は加藤時代に石を使った堰になった。

##### ② 球磨川下流域の現状と課題について

委) 昭和22年から昭和35年で河道の様子が大きく変わっているが、砂利採取によるものなのか。昔の河道には、生物がたくさんいたのではないかと思われる。

事) 河道が大きく変わったのは、砂利採取によるところが大きい。

委) 球磨川に関するアンケートをとっているが、萩原堤防や石刎ねなど、歴史的遺構について知っている人は少ないのではないかと。

事) 3年後球磨川の事業再評価を行う必要があるため、その際に球磨川に対する市民の意識についても把握したいと考えている。

委) 護岸のパターン分けについては、球磨川堰上流も行った方がよいのではないかと。また、護岸前面の局所洗掘についても分析が必要だと思ふ。

事) 整理し次回提示する。

### ③ 遙拝堰下流の瀬の現状について

- ・ 遙拝堰下流の瀬の現状について説明がなされた。
- ・ 招聘者から補足説明がなされた。

### ④ 招聘者からの意見聴聞

- ・ 昔より、漁で捕獲される魚種が少なくなった。
- ・ 昔は河口部に広大な干潟があったが、砂利採取により河床が低下し、ヨシ原が消失してしまった。ヨシ原は満潮時の稚アユをはじめ多くの稚魚の隠れ場所である。漁協としてはヨシ原を復活させたい。
- ・ 近5年くらいにアサリのために覆砂事業がなされた。特に、石混じりの砂を撒くと空隙の効果なのかアサリの稚貝が棲みつきやすい。石混じりの砂を巻くことが地盤を安定させるということでも有効なのではないかと思ふ。
- ・ ここ10年くらいでアマモ場が広がった。そのアマモにサヨリが産卵するようになった。サヨリは球磨川堰まで遡上している。このため川岸にもヨシが茂る環境になるとなお良い。
- ・ 遙拝堰下流の瀬付き場は遙拝堰直下流と球磨川堰下流の2カ所。この瀬付きがなくなり掛漁の行使者数は昭和59年65名であったが年々減少し平成24年には15名まで減少している。アユがとれないため漁をする人も減少した。産卵場の環境が悪化したことが要因と思われる。
- ・ 漁協としては、河床の局所洗掘と堆積の改善、遙拝堰下流左岸を多自然護岸化、豊原せせらぎ水路の改良、遙拝堰魚道の改修をお願いしたい。
- ・ 遙拝堰の落差が2m程度あり、落下する衝撃で多くの流下仔アユが死滅している。
- ・ 魚道が突き出した形式であるため、遡上するアユがのぼり口を見つけられない。
- ・ 球磨川は尺アユが有名で県外からも連泊で釣り愛好家が訪れた。
- ・ 球磨川産以外のアユが放流されてきたことから、大型の球磨川独自のアユが少なくなり球磨川の魅力が落ちた。在来種である球磨川の尺アユを増やす努力が必要だ。そのためにも資源の再生産に有効な遙拝堰の下流の瀬を良くする必要がある。
- ・ 昔、人吉ではアユ釣りの客で、連日旅館が満員だったという話を聞いた。

- ・天然アユが遡上するというだけで、良い川だとイメージする人が多い。
- ・遙拝堰から球磨川堰にかけての流速の低下が、アユの生息場、採餌場、産卵場としての質を低下させている。
- ・河川に関わる団体は、立場に関わらず協調体制をとって事業を進めてほしい。

委) 遙拝堰より上流まで遡上するのか。また、産卵のタイミングと場所はどこか。

招) 秋に産卵して春に遡上する。昔は横断工作物がなかったので五木まで遡上していたという話もある。産卵は上流でも行われているようだ。

委) 餌となる付着藻類があれば上流まで遡上する。横断工作物があると、海へ戻るリスクが高まるため、強い個体は一番海に近い瀬で産卵する傾向にあるようだ。

委) 稚アユが産まれた川に戻ってくるのかどうかはいろいろな条件がある。遡上する条件を整えた川にしていくべきである。

委) 全国的に、海岸線や河口部が整備され潮の干満により露出する場所が減ったことや砂利掘削などで河床の比高が下がったせいで生息場を失ってしまった巻貝類が多い。流下能力的に問題がなければ、水際の処理の工夫をするべき。また、昔の球磨川には、現在の熊本県のレッドデータブックに記載している回遊魚のカジカの仲間がいた。一方で、氷川では生息が確認されている。工夫次第では、球磨川にもカジカの仲間が復活する可能性もあると思われる。

委) 大きなアユはどこにいるのか。

招) 中流域に多い。錦町あたりにもいるが少ない。昔は下流域にも降りてきていた。

委) ウナギは江戸時代八代の名産だった。現状はどうか。

招) ウナギには海と川を回遊する種、川に遡上して留まる種、海にずっといる種の3種類ある。そのうち海に留まる種を漁協で扱っている。最近では、シラスウナギの値段高騰で、八代の魚市場で売り上げが上がっている。一方で、回遊するウナギを保護しようという運動もしている。

招) 天然うなぎについては、全体的に少ないので養殖業者が養殖するために買い集めている現状もある。

招) 以前は石を持ち上げるとウナギがいたが現在はコンクリートで護岸を固めたために、住む場所がなくなったのではないか。

委) 試験施工箇所には食み跡はあるようだが、産卵はしたのか。

招) 一部には産卵したが小砂利が流されるので必ずしも良好な状態とは言えない。

#### ⑤ 今後のスケジュールについて

- ・参考資料として配布した環境情報図には重要種の位置情報が記載してある。規約第6条の規定に基づきその取り扱いを委員会に諮り、参考資料は委員限りとし公表は控えることで了承された。

- ・ 3月か4月に第3回委員会を開催したい。
- ・ 次回の委員会では、萩原堤防のデザイン、自然再生事業の検討（瀬の再生）、環境に配慮した汽水域のあり方についての検討を予定している。

委) 萩原堤防のデザインをするにあたり、加藤清正の治水五訓について調べておいた方がよい。どのような背景で治水事業が行われてきたのかを整理しておくべきである。また、石積みのデザインをするのであれば、周辺でどのような石積みのものがあるのかも整理しておくべきである。

遙拝堰の形は、元々の複列砂州の瀬頭に杭を打って、瀬の原型ができたと思われる。つまり、自然の砂州の形をベースにできているのではないか。そのことがアユの産卵場に関係してくると思われる。また、河床材料、勾配、流速にも関連してくるので、遙拝堰の形状については成り立ち等を整理しておくこと

－ 以上 －